

令和4年度 “信州の木”建築賞 審査委員会講評

木造化、木質化のお手本となる建築物を選定する“信州の木”建築賞は、平成28年度に創設して以来、今年で7回目となり、長野県内で木造建築に携わる者にとって栄誉あるものとして定着してきた。

本年度は、「延べ面積が300㎡超で、店舗、事務所、診療所、学校等、多くの者が利用する県産木材を活用した施設」をテーマとした。応募作品数は5作品と少なかったが、どの作品もそれぞれの特徴があり、非常にレベルの高いものばかりであった。

今回の主な評価の視点としては、

- ・地域の事業者や技能者が主体となってかかわり、木造建築等の技術の継承や発展につながるもの
- ・木材の調達工夫や木材利用の仕掛けなど、林業、木材振興に寄与しているもの
- ・県産木材の利用について、主要構造部や内装材に限らず、木質系建材や建具、家具などにも取り入れ、全体の調和がとれたもの

を軸として、

- ・デザイン・まちなみや周辺の景観との調和
- ・省エネルギー化への取組

を加えた5点である。

一次審査では、まず、応募資料をもとに1作品ずつ審査委員が講評し、意見を交換した。審査委員は意匠、構造、材料など様々な職種、専門分野から構成されている。そこで、それぞれの専門分野の視点から作品を評価し、その情報を審査委員全員で共有した。どれも二次審査へ進んでも申し分ない作品であったため、全ての作品が二次審査の対象となった。

二次審査は、ここ2年、新型コロナウイルス感染症の影響によりできなかった現地審査を、審査委員全員で行った。実際に作品を見ながら、応募者へのヒアリングを行い、その後、一次審査と同様に審査委員で意見交換し、投票結果をもとに最優秀作品を1点、優秀賞1点をそれぞれ選定した。

最優秀賞は「長野県林業大学校 学生寮棟」に、優秀賞を「nagano forest village 『森の駅 Daizahoushi』」に決定した。

最優秀作品である「長野県林業大学校 学生寮棟」は、流通している定尺材の木材を使用していることや、一般的な住宅用の金物で構成されており、技術者・技能者にとって非常に参考にできるものであった。プランニングにおいても、プライベート性・居住性を高めた住宅の延長線上にある学生寮という感じで、山に対しても学生に対してもあたたかい空間となっており、学生の保護者からもここなら安心して子供をあずけられるといった感想があった。作品自体の出来栄は非常に優れているものであった。

優秀作品は、敷地の元々の高低差を活かし、うまくスキップフロアを使いながらデザインされたものであった。大座法師池に対する計画については委員からさまざまな意見が出たが、現地で建物間と共用デッキの関係性から、このような見せ方もあるのだなという印象であった。また、この建築物は庇が出ていないことで、少し心配な面もあるが、今後の木の色や風合いがどのようになるか楽しみであるといった意見もあった。全体的に良くまとまっている作品であった。

当建築賞は、「お手本」となる優れた建築物を表彰することで、技術者・技能者のスキルアップを図るとともに、広く県民の皆様にもその魅力を発信することである。今回の対象は、多数の者が利用する中規模以上の建築物であるが、特殊な寸法の材料ではなく、定尺の地域材や一般的な金物を使うことで、まさしく技術者・技能者のお手本となるような作品が選ばれる結果となった。

先進的な建築物は今後、木材の利用、木造建築物の普及を図っていくうえで、広く周知が望まれるものであり、当建築賞の趣旨にも合致するものと思われる。

建築物の使い手と、その背景にある木材関係者や施工関係者などのづくり手などにより、地域内で優れた建築空間を創出するため、当建築賞を通じ、継続した普及啓発を期待したい。

結びに、日常業務でお忙しい中、応募資料の作成や現地でご説明いただいた応募関係者の皆様に感謝を申し上げます。

令和4年11月21日

令和4年度“信州の木”建築賞

審査委員長

京都大学生存圏研究所 教授 五十田 博